

第10章 危険箇所の通過法

戸隠山アリの戸渡りのように狭い尾根を馬乗りになって渡る所もときにはあるが、無雪期に一般道を登山する限り、初めから分っている危険箇所を初心者が登山するということは稀だ。多くのケースは思いも掛けずに危険箇所に遭遇するもので、登山道が崩壊していたり、悪天候で状況が悪かったり、メンバーの一部が疲労や病気で体調不良に陥った場合だ。危険箇所には絶対的危険箇所と心理的危険箇所の2通りがある。絶対的危険箇所は何かあったら致命的事故に陥る場面で、難易度でなく危険度で判断したい。ロープ等の安全措置をセットすることに自信が無かったら、迂回するなり、引き返すなり、停滞するなりの確実な行動をとってほしい。心理的危険箇所はメンバーが怖がって萎縮している場合で、ロープを張りスワミベルトとカラビナを装着してやれば精神的況縛から逃れて、案外簡単に通過できる。時間ロスを理由に安全措置を省略する人を見るが、メンバーの実力によっては苦勞して歩くより返って時間節約になる。安全措置は事故を起こさない役目だけでなく、万一事故が起こった時、被害を軽く収める役目もする。一担山に入った以上はどんな事をしてもしも下山しなければならないのだから、ロープ等の非常装備を使いこなせるように普段から練習しておこう。

誰かと話した時に“谷に落ちた人を引き上げる方法を教えて下さい”と言われた。しかし、傾斜が緩い谷で墜落者が自力で動けるようなら手助け出来るが、そうでない場合に初心者集団で引き上げるのは無理だ。ロープを固定し、懸垂下降で下りたとしても、その人を背負ってプルージックで登り返すのは余程の体力と技術が無くては出来ない。2人をロープに結んで、大勢で呼吸を合わせて引っ張ると言っていたが、確保器を使わないでそんな事をして、途中で緩んだら返って危ない。ロープは墜落してから使う物ではなく墜落しないように安全を確保する為の物だ。

1、一般道での危険箇所

(1) 急斜面の下り

スリップしたり浮き石に乗ったりして転倒し、怪我をするケースがある。歩き方の練習をして、体重移動のことやフラットフットの方法を覚えよう。段差を飛び降りると一瞬にして膝を痛める。段差で心配ならお尻をついても良いから、無謀なことはやめてほしい。

(2) 滑りやすい場所

赤土・木の根・木道・苔の生えた岩場・丸木橋・凍結道・濡れたところ等、滑りやすい道がある。スリップしてバランスを崩し、転倒滑落到らないためには静荷重・静移動が重要だ。滑りやすい所では歩幅を少し広めにとり、体重移動を素早くやるのがコツ。

(3) ガレ場

人の手で動かせる程度の岩石がごろごろしている場所をガレ場と言う。ぐらぐらする浮石に足を取られて転倒したり、石の割れ目に足を挟んで捻挫・骨折する例がある。歩き方には練習と共に経験も必要。

(4) ザレ場

ガレ場の岩石をもっと小粒にした場所をザレ場と言う。スリップしたら尻餅をついて転んでしまった方が返って安全で、格好を気にして耐えると捻挫・骨折の原因になる。事故例の中でザレ場の捻挫・骨折がとても多いが、殆んどケースが何でも無い広い場所で、堪えて捻った足首に自分の体重が乗ってしまった結果だ。

(5) 痩せ尾根

1人～2人がやっと通れる狭い尾根を痩せ尾根と言う。突風に煽られたり、対向者を避ける時バランスを崩して転・滑落する例が多い。

(6) 崩壊地

登山道の一部が悪天候などで崩壊している場所を崩壊地と言う。崩壊の程度を見極めて通れるかどうか判断しよう。通行中更に崩れたり、上部から落石があつてはいけなから注意しなければならない。

(7) 岩場

スリップしてバランスを崩したり、足を踏み外して転・滑落しないように三点確保のバランスクライミングを心掛ける。自然界の物は信用出来ないなので、いきなり手掛かり・足掛かりに体重を掛けてはいけな。浮いていないか脆くなっていないか確認した後、ジワーッと重心を移すようにしよう。危険な場所は誰でも怖いだが、緊張し過ぎて体が硬張ったら柔軟性が失われて危ない。“自分は猫だ、猫だ”と暗示にかけてバランス良く歩くのも一つの方法だ。ザックの横に引っ掛かり易い物が付いていないか、ストックをザックにしまったか等、身支度の不注

意は事前に防ごう。ザックカバーは岩角に引っ掛けたり、風を含んで体を飛ばすから核心部ではザック内にしまう。

雨上がりの午後は落石が多い。常に上部に注意して行動し、可能性があるなら休憩中も上を見ながら立って休む。「ラーク」と聞こえたら声がした方を見るのではなく、自分の上を見よう。石から目を離さず小さく避けること。慌てて大きな動作をすると勢い余って転落するかも知れない。間近に迫って避けきれない時は自分のザックで受ける。その可能性がありそうな場所では予めウエストベルトを外しておく。岩稜帯は踏み跡が消え易いのでルートを誤って脆い岩場に迷い込むことがある。気付いたら来た道を引き返そう。近道のつもりで、思い込みで進むと更なる危険地帯に深入りする。

リーダーはメンバーの行動に気を配り、前の人との間隔を適度に空けさせよう。何かの弾みで接触すると前の人バランスを崩す。初心者の中にベテランを配置すればパーティー全体がスムーズに行動出来る。

(8) 鎖場・梯子場

梯子にしがみつからないこと。理由は『岩登りと三点確保』の中の“ハンドホールドの捉え方”で詳しく説明している。鎖場は腕力で強引に登らずに足掛かりを重視し、鎖はバランスの補助として手を添えるだけに留めよう。素手の方が強い握力が得られるから手袋は外した方が良く、リーダーが一つ覚えで“手袋を外せ”と指示してはいけない。冷え性の人が凍えた手で握ったらもっと悪い結果になるので、外すかどうかは本人の判断だ。

(9) 沢の徒渉

増水した沢を無理に渡ろうとしてはいけない。流れが緩やかであっても、安全に渡れる深さの目安は膝までだ。浅くて渡り易い所を探して2人以上で肩を組み、斜め下流側に水圧を逃がしながら渡る。足を水面上に上げないように擦り足にし、腰を落して川底を確認しながら渡ろう。流れが強い時は下流に滝がないことを確認した方が良く、雪溶け水は足が凍るほど冷たいので靴を脱がないで渡る。

(10) 雪渓

白馬岳大雪渓が人気ルートであるように夏の一般登山でも雪渓を歩くことがある。注意するのは溶け始めた雪渓で、厚さが薄くなった所を歩くと踏み抜きの危険がある。雪渓は中央部が水の温度で溶けて薄くなり、両端が岸の地温で溶けてクラック状になっているので、左右共に巾の1/4程度が安全だ。しかし、その場所もいつかは薄くなるのだから、溶けて崩壊寸前の雪渓には近付かないようにしよう。落石は音もなく雪面を滑ってくるから、常に上方に注意しよう。

2、ロープワーク

一般道で使うロープワークには、ロープを横方向に張りスワミベルトを装着してカラビナスルーをするケースと、ロープを縦に張ってプルージックで登るケース、同じく縦に張って懸垂下降で下りるケースがある。この他にコンテナスといって2人の体をザイルで結び合っって前後に並んで歩くケースもあるが、1人が墜落したら2人共落ちてしまう恐れがあるので余程の熟達者以外はやってはいけない。

(1) スワミベルトを装着してのカラビナスルー

スワミベルト・安全環付カラビナ・カラビナ・短スリングを使って初心者用に組み合わせた物が一般的に使われている。危険箇所の通過に不安のあるメンバーが装着し、予めリーダーが固定したロープにカラビナを引っ掛けて崩壊地等の危険箇所をトラバースする。緊急時は素早い装着と素早い解除が要求されるし、操作の確実性はもとより大切なので、繰り返し練習して体に覚え込ませておきたい。スワミベルトの末端は必ず折り返してバックルから抜けないようにする。スワミベルトから体が抜けることを不安がる人はスリングを太股にはいて下から固定しよう。スワミベルトの持ち合わせがない時はスリングで簡易ハーネスを作る方法もある。

リーダーの装備にはロープ・安全環付カラビナ×2・カラビナ×3・長スリング×2・短スリング×3が必要。ロープは2000mを越える中級以上の山岳の場合8mm×30m、日帰り低山の場合7mm×20m、を持って行こう。鎖や木・岩角等の信頼できる確保支点到ロープの両端を固定し、弛まないように要所にランナー（中間支点）をとる。ピンと張る事が重要で、緩いのに掴まると体が振れて危ない。ロープが仇になった事故が過去にもある。

(2) プルージックで登る

傾斜がきつくない所を大勢のメンバーが短時間で登るのに適した方法だ。リーダーが予め固定したロープにメンバーが自分の短スリングをプルージックで巻き付け、短スリングの反対側を自分のハーネスに固定する。一般登山にハーネスは持って行かないから、この場合は長スリングで作った簡易ハーネスだ。プルージックの結び目を手で押せば上方へズレルが離せば下方へはズレないので、メンバーは続けて次々と登って行ける。

(3) ロープを使った下降

代表的なのが懸垂下降で、『“岩登りと三点確保”』で詳しく説明している。一般登山に確保器（エイト環・ATC等）は持って行かないのでカラビナを使ってイタリアンヒッチで確保するのだが、これは熟達していないと危ない。傾斜が緩くて安全な所を素早く下降する方法としては肩がらみの懸垂下降がある。もっと安全な所なら両手でロープに掴まって下降すると良い。通称“ゴボウ”と言っている方法で、ロープの途中に幾つかコブを作っておくと握力の無い人でも楽に下れる。いずれの場合もロープはダブルにしておいて、全員が降り終わったら片方を引いて回収する。

3、安全登山の為に

折角ロープを持っていてもリーダーが使い方に慣れていないと返って危険を招くことがある。また、メンバーが三点確保によるバランスクライミングに自信が無いといざという時恐怖心から固まってしまう恐れがある。これが槍ヶ岳などの混んでいる所だとグループ以外の人にも迷惑を掛け、焦りから事故を招く結果になりかねない。ハイキングから登山に転ずる人は納得するまでグレンデの練習を積み上げてほしい。

クライミングの講習では必ず“手は添えるだけで、足で登るのだよ”と言う。これは正しいのだが聞く方が過剰に受け取って、手の力は不用だと考えたら誤りだ。クライミング中の大部分は足で登るのだが、難しい核心部では手の力が必要になる。鎖場・梯子場も同様で、普段は足で登るのだが、足を滑らせた“いざっ”という時は腕でぶら下がることになる。腕の力は安全確保の最後の砦だ。中高年者で鎖場・梯子場が怖いと言っている人を観察したら、腕力か握力が弱くてぶら下がった時自分の体重を支えられないから、らしい。これでは怖いはずで、リーダーが“怖くないよ”と言っても受け入れてもらえない。こういう人は普段のトレーニングで腕力と握力を鍛えることが大切で、少なくとも自分の体重が支えられるようになるまでは、危険地帯に入らない方が良い。不安があるとリズムを崩し、思わぬところで大事故になる。